

社会変化に伴う現代青年の特徴に関する一考察

—多元的自己と「ネット的思考」の影響—

高木 由起子（愛知県立東海商業高等学校）

廣瀬 幸市（鹿児島大学大学院臨床心理学研究科臨床心理学専攻）

An essay about a characteristics contemporary adolescent have

—Effects of multiple-self and “thought process on the internet”—

Yukiko TAKAGI (Tokai commercial High School)

Koichi HIROSE (Kagoshima University Graduate School of Clinical Psychology

Department of Clinical Psychology)

要約 高校において表面的な関わりをし、深く思考しない、自分の感情を理解し表出することができない生徒が増えてきているように感じる。また、いくつかの調査から、青少年が幸せと感じる割合は年々増えているが、一方で自殺者数も増加し続けているという結果が読み取れる。そこで、青年の変化に関連すると思われる内容について文献を調査した。従来心理学では、大人になるということは一元的自己を獲得していくこととされてきたが、変化していく社会に適応する形として、多元的自己の傾向が指摘されている。また、インターネットで好まれる言語形式の影響を受け、深く考えない曖昧さを欠いた短絡的思考（本稿では「ネット的思考」と呼ぶ）が広まっているという指摘がある。これらを概観して、現代社会に適応する形態として現れたと言える、多元的自己と「ネット的思考」を特徴としてもつ現代の青年について、その課題を推察した。

キーワード：多元的自己，青年期，情報化社会

1. 問題と目的

高校で生徒と接する中で、人との関わり方が表面的である生徒、欲がなく常に疲れている生徒、深く思考しない生徒、自分の感情を理解し表出することができない生徒が増えてきているように感じる。

藤野（2019）は、現代の友人関係において、キャラを用いたコミュニケーションが多用されていることを筆頭に、それらに伴うメリット・デメリットを挙げ、キャラ使用と心理学的な研究との関係性について論じている。

土井（2008）は、近年の青年たちの関係について、対立の回避を最優先し、衝突を避ける特徴を取り上げ、「優しい関係」とも表現している。

また、高石（2009）によれば、自身のカウンセラーとしての経験から、現代の学生の特徴として「悩めない」ことを挙げている。特に悩めない学生の存在に関し、「問題解決のハウツーや正解の提供を求める」点と「漠然と不調を訴え、何が問題なのかが自覚できていない」点が共通しており、それが行動化・身体化として現れる傾向

にあるとしている。

NHK放送文化研究所が1987年、1992年、2002年、2012年に実施した「中学生・高校生の生活と意識」調査から、「何もやる気が出ないことがどのくらいあるか」「すぐ不安になることがどのくらいあるか」「何でもいいのにイライラすることがどのくらいあるか」という質問に対する高校生の回答を、図1に示した。どの質問でも「まったくない」とする回答が年々増えている。思春期の子どもに特有の不定愁訴が減ってきている、または、そういった自身の気持ちに鈍感で、気付くことができなくなっている可能性がある。

同じ調査の「今、幸せかどうか」という質問に対しては、図2に示すとおり「とても幸せ」と回答する生徒が年々増加している。今の生活における幸福感が高くなってきていることが分かる。内閣府による調査からも20代、30代で同様の傾向が見られる（図3）。

図4では、文部科学省が発表している高校生の自殺者数の推移と、先に示した図2の「今、幸せかどうか」の

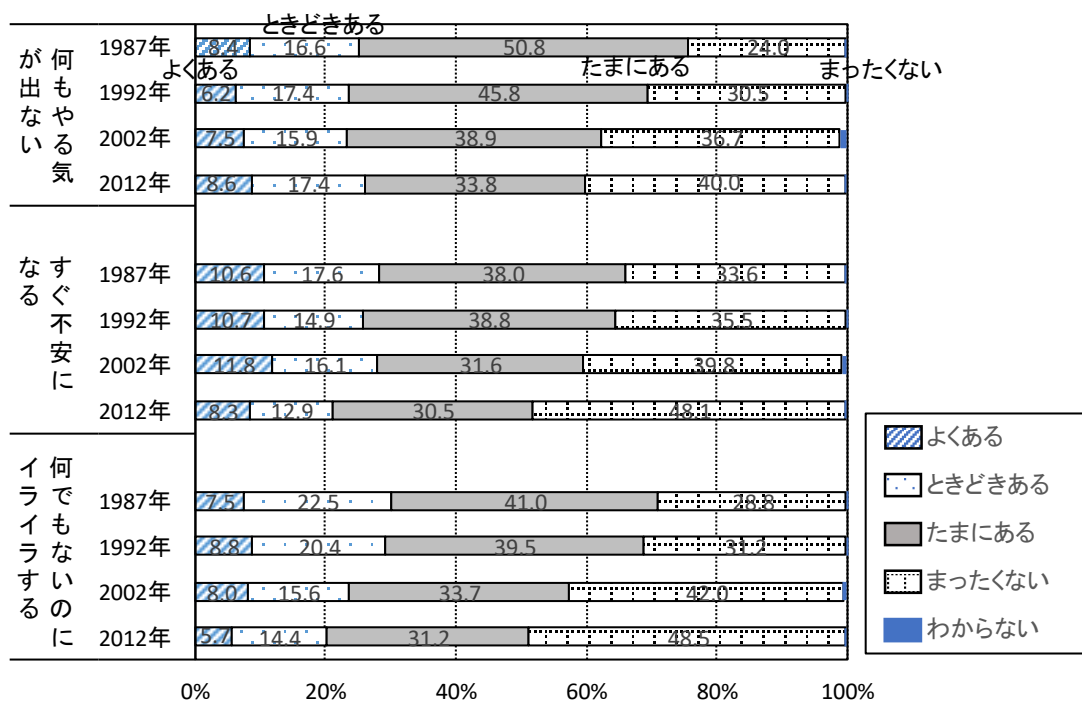


図1. 高校生の不定愁訴の推移（「中学生・高校生の生活と意識調査」（NHK放送文化研究所）を元に筆者が作成）

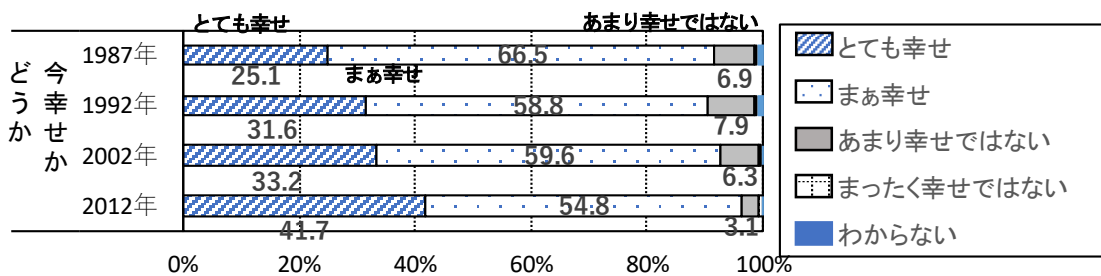


図2. 高校生の幸福感の推移（「中学生・高校生の生活と意識調査」（NHK放送文化研究所）を元に筆者が作成）

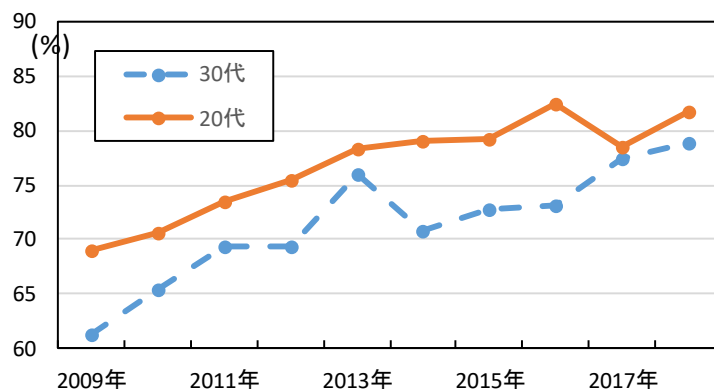


図3. 現在の生活に対し満足と感じている割合（内閣府「国民生活に関する世論調査」を元に筆者が作成）

質問に対する「とても幸せ」と回答した割合の変化を比較して示した。高校生が幸せと感じる数は確実に増えているが、自殺者数に減少の傾向はみられない。途中で国立・私立の高校が加わるなど調査の対象が増えたことを考慮に入れても、徐々に増加してきているように見える。ここで示している数値は自殺者の数であり、少子化により高校生の総数が減ってきていることを勘案すると、自殺者の割合としては更に増加している可能性がある。

高校生の関わり方や考え方の変化を感じていたが、アンケート調査からも、不定愁訴の減少、幸せと感じる生徒の割合の増加、自殺者数の増加など、青年の変化を確認することができた。そこで、青年の変化に関連すると思われる内容について、文献調査を実施した。

2. 現代の青年にみられる多元的自己

2.1. 新たな自己像「多元的自己」

心理学の知見において、自己は Erikson (1959/2011) による自我同一性論を軸に論じられることが多いと見受けられる。それらに基づくと、自己は成長過程で一元化されると考えられてきたが、青年に見られるさまざまな変化に対し、多くの研究者がこれまで考えられてきた一元的自己とは異なる在り方を指摘し始めている。

社会学者の浅野 (1999, 2006) は質問紙調査を行い、従来多くの若者がとっていた一元的自己が、単一で一貫したものではなくなりつつあることを明らかにし、このような状況を自己の多元化と表現した。「多元的な顔や状況に応じて切り替えていくという対人スタイルが広まりつつある」と説明している。

また辻 (1999, 2004a) は、若者に見られる「フリッパー（その時々気分に応じてチャンネルを気軽に切り替えるように、場面、場面に合わせて気軽にスイッチを切り替えられる）志向」に着目し、「いつでもどこでもつきあいを保つような包括的な対人関係が敬遠され、つきあいの範囲をけじめづけるような限定的な対人関係が好まれるようになってきた」と指摘した。一見希薄化したように見える対人関係であるが、そうではないことが、図 5 (b) に示すような自我構造（多元的自己）で説明で

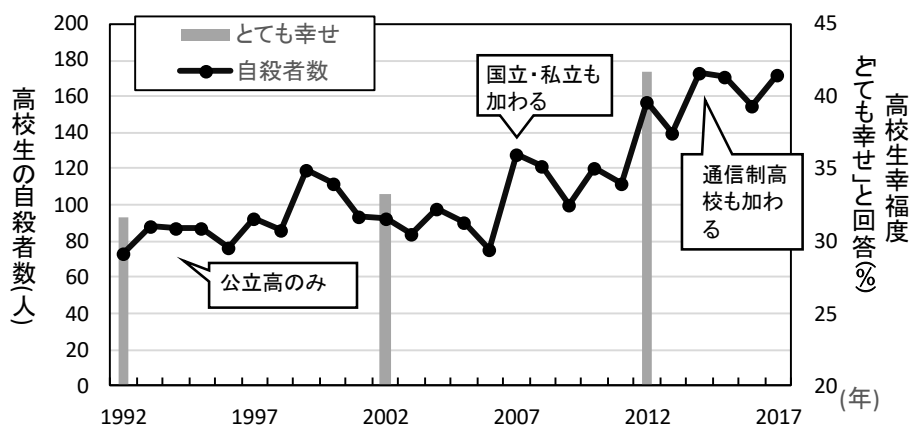


図 4. 高校生の自殺者数と幸せと感じる割合の推移

(文部科学省、NHK 放送文化研究所の調査結果を元に筆者が作成)

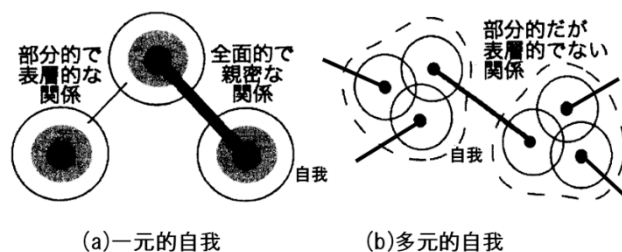


図 5. 自我構造の 2 つの模式図 (辻, 2004a)

きると提案した。図 5 の (a) に示すような同心円上の自我（一元的な自我）をイメージするならば、その中核から離れた部分をもってするつきあいは「心の深いところ」や「本音」を隠した表層的で希薄な対人関係を意味する。それは、本来の自己を単一のモデルとして仮定していることを意味している。しかし、(b) のように複数の中心をもち複数の円が緩やかに束ねられた自我構造（多元的自己）をイメージするならば、部分的な関係は同時に表層的でない関係をつくりうると述べている。すなわち、場面によって自己の変容がなされたとしても、それは本当の自分であると認識される自己を意味している。

自己が多元化してきているとする見解は他にもある（表 1）。また、この現象を心理学的な尺度を用い捉えようとする研究も多数報告されている。自己研究の在り方として、高石 (2009) は、1980 年代までの学生が S.フロイトによる心的構造モデルに則り、それ以降は解離モデルとして捉えることができることを指摘している。なお、辻 (2004a) は自己だけでなく、自分を感じる主体である自我自体が多元化しているという見解であるが、本稿では多元的自己もまとめて多元的自己と呼ぶこととする。

多元的自己がどの世代に多いかについては、次の報告がある。岩田 (2014) は、2011 年に調査した「話す友人

表 1. 多元的自己に関する研究・見解まとめ

プロテウスの人間	R.J.リフトン(1971) 提唱	「アイデンティティの拡散をむしろ積極的に肯定」「あくまで自分を一時的・暫定的な存在とみなし、次々に新しい仕事、役割に同一化して変身を遂げてゆく」現代社会の新しいスタイル。(小此木(1978)が紹介する)
モラトリウム人間	小此木(1978)	社会的な責任や義務を猶予するモラトリウム期間が延長される中、「“本当の自分”をそっと棚上げし」、「いつでも立場を変え、考えを変え、自分自身を変身させる余地を残しておく」青年像を指摘。
自己の多元化	浅野(1999,2006)	若者に見られる、自分らしき志向の広がり、自己の多元化(本文内で説明)を指摘。その背景として、友人関係が多チャンネル化、状況志向化し、繊細なものになっていることを説明。
多元的自我	辻(1999,2004a)	本文内で説明
断片的自己	高石(2000,2009)	1980年代以降の青年の自己は統合性が希薄で、「こころの中の混じりと都合の悪い要素は衝立で仕切るように切り離し、ばらばらのまま併存させている」
統合を放棄する自己	成田(2001)	「自己という一個の人格の統合を保持し、その中で葛藤を体験するのではなく、統合を放棄することで内的葛藤を体験せず、自己の一面あるいは一部を別々に生きるというあり方」
解離的人格システム	樫村(2007)	「一人の人がさまざまな相容れない人格を使っている」状態。「すべての人格を装っているわけでもないしすべての人格が自分の人格というわけでもない曖昧な状態で、分裂的に複数の人格を使っている。」
分人主義	平野(2012)	小説『ドーン』、新書『分人主義』で若者の在り方に対する考えを発表。対人関係ごとに見せる複数の顔がすべて「本当の自分」であり、これを「分人」と名付けた。「リアルの世界でもネットでも、場所ごとにいろいろな人格になり得る—ならざるを得ない—」
多元的循環自己	杉浦(2017)	「私たちの中には多くの循環自己がその記憶の循環の軌跡を残しており、それが時と場合、相手によって表に出てきて認識されているといえる。」

によって、相手に対する自分の性格が変わることがよくある vs どんな友人と話しても、相手に対する性格がほとんど変わらない」という質問項目に対し、前者の選択率は年齢が低い層ほど高いという調査結果を紹介している。また浅野 (2014a) によると、1992 年から 2007 年にかけての調査では自己の多元化の強まりを示唆する結果が見られたが、より新しい 2001 年から 2011 年にかけての別の調査 (浅野 2014b) では、自己の多元性に大きな変化は見られない (「いくつかの効果の絡み合いを丁寧に読み解いていく必要がある」) としている。これらの結果に基づくと、少なくとも 30 年前から進行してきた多元化が、現在も影響しているということになる。これらのことを考慮すると、溝上 (2008) が指摘しているように、近年の社会の在り方および対人関係の在り方は、Erikson (1959/2011) が規定していた時代とは異なっており、それに伴い、従来の自我同一性論では十分に説明できないと言することができる。

2.2. 多元的自己とキャラ使用について

岩田 (2006) は、自己の拡散と自己の多元化に関する調査において、自己意識に関する因子分析の結果、3 因子を抽出し、「自己複数性因子」の特徴がアイデンティティの拡散と同一視できないという状況から、自己の多元性に着目した自己意識の類型化を試みた。分類のカテゴリは、「自己複数性因子」を問う質問項目に由来しており、「状況性」、「戦略性」、「仮面性」の 3 要素を挙げている。

まず、「状況性」とは“場面によって出てくる自分が違う”という項目から測定される、現象面についての分類基準である。これにより、多元的自己を保有するの可否かの分類ができる。次に、「戦略性」とは“意識して自分を使い分けしている”という項目から測定される、その多元性が意識的な使い分けによるものであるかという観点についての分類基準である。これにより、「戦略的自己 (意識的に自己を切り替えること)」と「非戦略的

自己 (無意識的に自己を切り替えること)」とに分類できる。最後に、「仮面性」とは“自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある”という項目から測定される、「素顔の複雑化 (場面に応じた複数の顔の背後にある自己そのものの複雑化)」と「仮面の複雑化 (偽りの自分 (仮面) を本当の自分 (素顔) から切り離したうえで前者を複雑化する)」についての分類基準である。肯定的に回答している場合には、本当の自分を前提として、仮面のような偽りの自分を見出すことができる。他方、否定的回答をする場合には、場面ごとに違った自分ができても、そのどれもが本当の自分、素顔の自分とみなすような意識と捉えられる。このように、戦略的自己を「仮面使い分け型」と「素顔使い分け型」に、非戦略的自己を「仮面複数型」と「素顔複数型」に分類した。その上で、これらに自己一元型を合わせ、5 分類を試みている。

岩田 (2006) が分類した特徴を概観するに、藤野 (2019) が指摘している「キャラ化」は、岩田 (2006) における多元的自己と共通項を示していると考えられることができる。

ここで改めて藤野 (2019) の指摘するキャラ化を確認しておくと、それは「特に若い人たちの間で行われる、『キャラ』と呼ばれる、人の特徴の一部に焦点を当ててデフォルメし、わかりやすさと個性に応じて割り振られた役割に応じて振る舞うコミュニケーション」のことである。そして、キャラ化に対してパーソナリティが与える影響における研究から、キャラ化に影響を与えているとされる個人的パーソナリティとして、「状況による使い分け」、「演技性」の 2 要素を取り上げている。

まず、「状況による使い分け」とは、キャラを時と場合に応じて使い分けることにより、自己を並列させていることである。これは、それぞれの関係性や場面において複数の自己を並列させ、キャラを介して自己の切り替えを行っているといえられる。勝家 (2013) は、自己の

切り替えを「状況に応じて意識的または無意識的に自己を切り替えたり、関わる対象を選択したりする傾向」と定義した上で、因子分析を行い、「意識的な自己切り替え」、「無意識な自己切り替え」といった因子を見出した。これを岩田（2006）の分類と照らし合わせる時、自己を意識・無意識に切り替える「戦略性」の特徴の一部が反映されていると考えることができる。

次に、「演技性」に関して藤野（2019）は、キャラ化の程度に影響を与えると表現しており、その種類としては「相手に好印象を与える演技をする場合」と「相手に嫌われないように行う場合」との2つに分類できるとしている。定廣・望月（2011）は、演技の種類として上記2つを「好印象演技」と「調和的演技」と表現している。すなわち、演技をするということは、その場においてふさわしいとされる表現方法で他者と接することであり、その目的に応じて振る舞い方が変わることが予想される。これは、岩田（2006）における「仮面の複雑化」を反映しており、反対に、演技をしないということは「素顔の複雑化」を反映している、と考えられる。

したがって、岩田（2006）における自己の多元化の要素である「状況」、「戦略」、「仮面」の特徴は、藤野（2019）におけるキャラを振る舞う者のパーソナリティ特徴の「状況による自己使い分け」、「演技性」と共通した特徴として考えることができる、と言うことができるだろう。そこで、これらの関係性を図6に示した。

3. 現代の青年にみられる「ネット的思考」

3.1. 「ネット的思考」の蔓延

言語や思考の仕方に変化が表れていると指摘する声がある。それらの一部を表2にまとめた。平田（2017）は、日本語がインターネットで使われる言語形式に従うような、曖昧さを許さない言葉に変化してきていると指摘している。また他のいくつかの文献では、簡略化された言葉に沿って思考を形成するため自分の感覚などの表現が

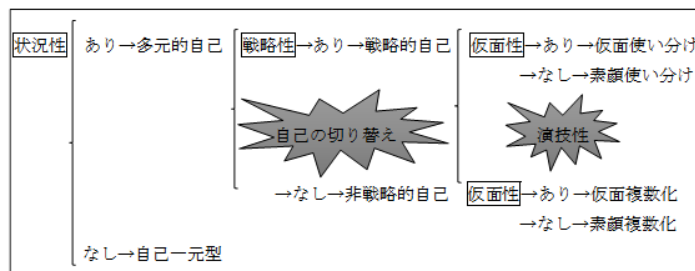


図6. 自己の多元化に着目した自己意識の類型化

（岩田（2006）の図に「自己の切り替え」「演技性」を筆者が追加記入）

行動や悩みを正しく言語化できないこと（高石 2009）、人のこころの「あいまいさ」に堪えられなくなってきていること（富田 2016）が述べられている。斎藤（2009）は、メディアなどの影響により人々が「内面を解離させ、内省的構造を捨てるに至って」と指摘している。松本（2014）は精神病理学者の内海健、加藤敏、鈴木國文たちの考えを踏まえ「世界が自閉症化（発達障害化）しているのではないか」という時代診断を紹介している。

以上のように、深く物事を考えず、曖昧さをもたない、短絡的な思考方法について多くの指摘がある。このような思考方法に対して共通の呼称がないので、本稿ではこれらの思考方法を「ネット的思考」と定義し、使用することにする。

このように定義すると、現代の青年の変化として指摘されている特徴は次のようにまとめられる。

- ・周囲に自己を合わせ状況に応じ切り替える多元的自己
- ・深く考えず、曖昧さを欠いた、短絡的思考方法である「ネット的思考」

「ネット的思考」は自身の在り方について深く考えないため、周囲に合わせる多元的自己を強め、また、多元的自己の度合いが強まるとますます深く考えなくなり

「ネット的思考」の傾向が強くなると推察でき、これら2つの特徴は互いに影響し合い強め合っている可能性が

表2. 言語や思考方法の変化についての指摘まとめ

日本語の変化 (曖昧さがなくなる)	平田(2017)	メールなど短文での誤解を避けるために、主語や目的語を明確にする方向への変化を、多くの言語学者の意見をもとに指摘。また、曖昧な表現を許さず、誰が聞いてもほぼ同じ意味に捉えられる、英語のような言語に近づいていくことを予測。 (「悪い方向ばかりではない」としている)
言葉のフォーマット化	信田・松本(2018)	現代、自分の思考や感覚などを表現する言語形式が、ネット上で数行書かれているものになってきている。言葉は本来文節化され多義的になっていく特徴をもっていたが、現代では一意に意味が決まる記号的な言葉が増え、ある意味フォーマット化している。
悩みを言語化できない	高石(2009)	「時間をかけ主体的に悩めない」「『悩む』ためにはその苦しさを言語化することが必要だが、そのような自分の内面の情動を『言葉にする』力が十分育っていない」。
寛容さのない思考	富田(2016)	スマホやデジタルが寛容さを省いている。情報アクセス的な「便利さ」に慣れだすと、待ったり戸惑ったりする人のこころの「あいまいさ」に堪えられず「間」が抜けて衝動化してしまう。
ゲームの論理で行動	辻(2004b)	現実の論理や感覚がうまく働かず、ゲームの論理で動いてしまうので、リアリティに欠ける行動や思考をする。いわば「生の実感」のようなものが乏しくなっている。
情報化による内面の解離、内省構造の放棄	斎藤(2009)	メディアによる媒介などの結果として「心」の視覚化が進行し、「心」に亀裂が入ったり複数に分割したりするイメージができた結果、「解離」が流行した。また、「主体がすすんで内面を解離させ、内省的構造を捨てるに至って」と指摘している。
合理化、効率化に適応した心的システム	松本(2014)	精神病理学者による「世界が自閉症化（発達障害化）しているのではないか」という時代診断を紹介。現代の心的システムが単なるデータベースに従った計算機としての合理性しか持たないため、決断の契機がなくなると自己が形成されていない（内海健）。高度に情報化された今、コミュニケーションは最小限しか必要とされず、決まりきったマニュアルやガイドラインに拘り定規に従うことが効率的とされるため、自分の理性を自分で利用して判断していく主体にとっては逆に生きづらいものとなり、「社会のアスペルガー化」を引き起こしている（加藤敏）。

ある。そのモデル図を示す（図7）。

3.2. 多元的自己と「ネット的思考」が出現した背景

浅野 (2013,2014b) は自己の多元化が進んだ時代背景について、社会学の分野でなされてきた Riesman (1960/1964)、Gergen (1991)、Bauman&Vecchi (2004/2007) による次の 3 つの議論を紹介している。Riesman (1960/1964) は、近代社会において資本の蓄積や消費の拡大が進む中で「ひとびとがよりまじりあい、おたがいどうしを気にするようになり」個人が人生において目指す目標など「個人の方向づけを決定する」ための基準を「同時代人」（知り合い、マスメディアを通じて知っている人などの他人）に求める「他人指向型」の在り方になってきたと説明した。一方、Gergen (1991) は、コミュニケーション手段の重層化・複雑化により、客観的真実が保証されなくなったポストモダンにおいて、人は関係ごとに様々な顔をもつようになったが、浅い、表面的な、矛盾した自己の在り方であると説明した。Bauman&Vecchi (2004/2007) は、グローバリゼーションにより「地域社会の保持する権力がゆるやかに解体され、縮小されるという事態が起こった」こと（社会の液状化）により、時間の経過に左右されずにアイデンティティの一貫性や持続性を保つことが難しい問題に直面している、と説明している。

日本においても、戦後復興、近代化を進める中で似たような社会変動を経験し、自己の在り方に影響を受けたと考えられる。先の藤野 (2019) によれば、キャラ化する目的として「承認欲求」を挙げている。これは Riesman (1960/1964) による消費社会の考え方を反映したものの一部であると考えることができるであろう。

また、日本人の自己観の影響も考えられる。自分自身のことをどう理解しているかという自己観は、個人が属する文化の特質に大きく関わることが知られている。Markus&Kitayama (1991) は自己の捉え方を比較し、アメリカ人については「相互独立的自己観」、日本人については「相互協調的自己観」という文化的自己観をもつと提唱している。「相互協調的自己観」はまわりの人との関係の中に自己を見いだすものであり、相互依存적であり、集団や関係性を重んじる傾向がある。

また、現代社会では、スマートフォンが体の一部のようになり、いつでもインターネットに接続できる状態であるため、インターネット空間と現実世界の境界は弱くなりつつある。インターネット空間では、自己を自由に創造し修正することができるため、自己の多元化に適した環境であると考えられる。内閣府が提唱する Society5.0 や社会の動向を考えると、この境界は今後ますます弱ま

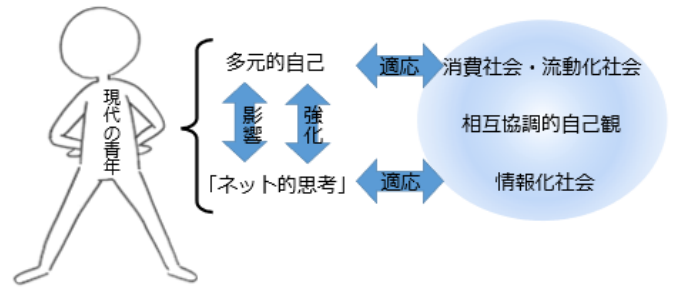


図7. 現代の青年の特徴と背景 モデル図
(筆者作成)

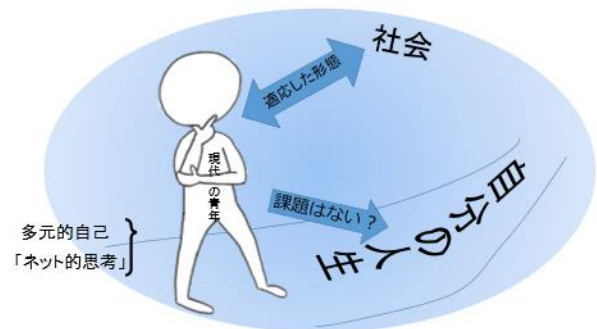


図8. 現代の青年が生きる人生のモデル図
(筆者作成)

り融合していく方向にあると思われる、自己の多元化が進みやすい傾向にあると思われる。

また、「ネット空間」が身近になる中で、インターネットで好まれる言語形式の影響を受けた「ネット的思考」が見られるようになった、と考えられる。言語形式の影響だけでなく、インターネットを検索すれば何事も瞬時に答えが手に入るため深く考えることは少なくなってきたことも、「ネット的思考」の傾向を強めていると考えられる。

以上のように、多元的自己、「ネット的思考」は、現代社会に適応する形で進展したものである、と考えることができる。

4. 多元的自己および「ネット的思考」を有する青年の課題

多元的自己、「ネット的思考」をもつ者は、現代社会に適応して変化した、いわば新しい形態であると言えるだろう（図8）。一方で、日常生活で生じる対人関係やストレスなどに対する、Society5.0 への移行時期の現時点で考えられる課題を指摘してみる。

・課題①多元的自己により過剰に周囲に合わせている場合、日頃からつらさやストレスが溜まる。しかし、無意識な適応である場合、つらさやストレスの原因、あるいは

は自身のつらさ自体に気付くことが苦手である。

・課題②「ネット的思考」により深く考えない傾向があるため、振り返ることが苦手で、内省する力が弱く、日頃から周囲に合わせているため周囲の意見に左右されやすい。問題を解決することも苦手である可能性がある。

・課題③多能的自己により日頃から周囲に合わせており、周囲に助けを求めることが苦手である。

・課題④「ネット的思考」は感情を表現、理解することが難しい思考方法のため、自身の問題にぶつかったときに、感情を調整して情緒を安定させることが苦手である。また、多能的自己のそれぞれの自己が体験したことを統合できる核がない場合、体験から生じる感情に向き合い整理することができないと考えられる。その結果、自分の感情を理解し抱えることができず、理由が分からないまま身体に不調をきたす（身体化）。ストレスが大きい場合には、リストカットなどの自傷行為、自殺などの行動化に結びつくことも考えられる。

このように、上に挙げた課題のうち、課題④の精神的つらさの身体化、行動化に関しては、苦米地（2006）や高石（2009）も、悩むというレベルを通り越してすぐに「落ち込む」あるいは「身体化する」傾向を示す大学生が増えていると指摘しており、既に問題視されている課題との関連性も連想される。

そこで、1.で紹介した調査結果に見られる高校生の変化が、以上で推察する課題と関係があるかどうかを考えてみることにしよう。

図1に示した、「すぐに不安になる」などの不定愁訴が減ってきていることは、現代の青年が自身のつらさ自体に気付くことができないこと（課題①）、自身の感情を理解することができないこと（課題④）と関係している可能性がある。また、図4に示した、幸せと感じる者の割合が高まっているにもかかわらず自殺者数が減らない現象は、多能的自己や「ネット的思考」をする青年が自身の感情に気付くことができないまま行動化する傾向（課題④）の表れである可能性がある、と考えられる。

5. おわりに

多能的自己や「ネット的思考」が出現した背景を踏まえて現代社会を見ると、今後ますます多能的自己や「ネット的思考」をもつ青年の数は増え、その傾向は強くなっていくことが予想される。また、ネットに触れて生活する人口の年齢も低くなりつつある。これらに対して、学校教員はどのようなことを意識して関わっていけばよいのだろうか。本稿を終るに当たって、最後にこのことを考えておきたい。

まず何より大切なことは、学校教員が現代の青年の特

徴や課題について理解することである。彼らの多能的自己、「ネット的思考」という特徴を知ること、得意なところを生かす、推察される課題を補う、悩みやトラブルを理解する等の対応を考えることができる、あるいはそれらの対応を行う上での連携が取り易くなると考えられる。例えば、「いい子」に見えている生徒が、実際は教員の期待に応えられるように自己に合わせて無理をしているのかも知れない。そのような生徒を正しく理解すれば、本例に則って、期待をかけ過ぎて追い詰めることを避けることができる。このように接し方を考えることと同時に、多能的自己や「ネット的思考」に対し、学校でできることについても考えていかなければならない。

教員の理解に合わせて、生徒自身が多能的自己や「ネット的思考」の特徴・背景を知り、自身の課題を推察することができるようになるのも、彼らの内省につながることであり、と思われる。すなわち、社会の変化に伴って、教員と生徒が共に変わっていくことにより、現代青年たちと真に向かい合うことが可能となる、と考えられるのである。

以上、本稿では、現代社会の変遷に伴う多能的自己と「ネット的思考」を特徴として有する現代青年に関して、その課題を推察した上で、現場の学校教員がどのように意識して彼らと関わっていくとよいか、一考してみた。学校教育現場における教育実践の一助になれば幸いである。

引用文献

- 浅野智彦（1999）親密性の新しい形へ。富田英典・藤村正之（編）みんなぼっちの世界，恒星社厚生閣，pp.41-57.
- 浅野智彦（2006）若者の現在。浅野智彦（編）検証・若者の変貌—失われた10年の後に—，勁草書房，pp.233-250.
- 浅野智彦（2013）「若者」とは誰か アイデンティティの30年。河出書房新社。
- 浅野智彦（2014a）．多能的自己と移行過程。溝口慎一 他（編）高校・大学から仕事へのトランジション，ナカニシヤ出版，pp.199-203.
- 浅野智彦（2014b）SNSは私をかえるか。松田美佐・辻泉・土橋臣吾（編）ケータイの2000年代；成熟するモバイル社会，東京大学出版会，pp.129-133.
- Bauman, Z., & Vecchi, B. (2004) *Identity. Polity*. 伊藤茂（訳）（2007）アイデンティティ，日本経済評論社，p.33-52.
- 土井隆義（2008）『友達地獄』—「空気を読む」世代のサバイバル。筑摩書房。
- Erikson, E.H. (1959) *Identity and the life cycle*. New York: W.

- W. Norton. 西平直・中島由恵（訳）（2011）アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房.
- 藤野遼平（2019）青年期における「キャラ化」に対してパーソナリティが与える影響について, 大阪大学教育学年報 24.
- Gergen, K. J. (1991) *The saturated self: Dilemmas of identity in contemporary life*. New York: Basic Books.
- 平田オリザ（2017）演劇を教える/学ぶ社会. 現代思想 45-15. 青土社, p.51.
- 平野啓一郎（2012）. 私とは何かー「個人」から「分人」へ. 講談社, p.7,56.
- 岩田考（2006）若者のアイデンティティはどう変わったか. 浅野智彦（編）検証・若者の変貌ー失われた10年の後にー, 勁草書房, pp.151-189.
- 岩田考（2014）. ケータイは友人関係を変えたのか. 松田美佐・辻泉・土橋臣吾（編）ケータイの2000年代; 成熟するモバイル社会, 東京大学出版会, pp.175-178.
- 樫村愛子（2007）ネオリベラリズムの精神分析. 光文社, pp.283.
- 勝家さち（2013）現代大学生の自己意識と友人とのかかわり及びアイデンティティ形成に関する研究ー青年の基本的信頼感に焦点を当ててー, 愛知教育大学平成25年度修士論文抄録.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 松本卓也（2014）DSMは何を排除したのか? 現代思想 42-8. 青土社, pp.94-95.
- 溝上慎一（2008）自己形成の心理学ー他者の森を駆け抜けて自己になるー. 世界思想社.
- 文部科学省（2018）児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（確定値）について, pp.115-116.
- 内閣府（2018）国民生活に関する世論調査. <https://survey.gov-online.go.jp/index-ko.html>（2019年1月15日取得）
- 成田善弘（2001）若者の精神病理ーここ二〇年の特徴と変化. なだいなだ（編）<こころ>の定点観測, 岩波書店, pp.10-12.
- NHK 放送文化研究所（2013・2002・1993・1988）中学・高校生の生活と意識調査. 放送研究と調査. NHK 出版 740号, pp.39-50・619号, pp.38-39・500号, pp.66-68・441号, pp.57-59.
- 信田さよ子・松本卓也（2018）斜めに横断する臨床＝思想. 現代思想 46-1. 青土社, pp.83,84.
- 小此木啓吾（1978）モラトリアム人間の時代. 中央公論新社, pp.11,52-54,74-75.
- Riesman, D. (1960) *The lonely crowd: A study of the changing American character*. New Haven, CT: Yale University Press. 加藤秀俊（訳）（1964）孤独な群衆. みすず書房, p.14-21.
- 斎藤環（2009）心理学化する社会. 河出書房新社, pp.206-211.
- 定廣英典・望月聡（2011）. 演技パターンに影響を与える諸要因の検討 日常生活演技尺度の作成及び賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連. パーソナリティ研究 20. 2. pp.84-97.
- 杉浦健（2017）. 多元的自己の心理学これからの時代の自己形成を考える. 金子書房, p.60.
- 高石恭子（2000）. ユース・カルチャーの現在. 小林哲郎 他（編）大学生がカウンセリングを求めるときー心のキャンパスガイド, ミネルヴァ書房, pp.32-34.
- 高石恭子（2009）現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援. 京都大学高等教育研究 No.15, pp.81-82.
- 苦米地憲昭（2006）大学生: 学生相談から見た最近の事情. 臨床心理学 No.6. 金剛出版, p.131.
- 富田富士也（2016）直接的人間関係は苦手. 児童心理 No.1025. 金子書房, p.50.
- 辻大介（1999）若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア. 橋元良明・船津衛（編）子ども・青少年とコミュニケーション, 北樹出版, pp.22-24.
- 辻大介（2004a）若者の親子・友人関係とアイデンティティ. 関西大学社会学部紀要 No.35 (2), pp.150-151.
- 辻大介（2004b）「ケータイ的なもの」の論理と心理. (北田暁大・香山リカとの対談). 世界 No.723. 岩波書店, p.70.

【付記】

本研究は科研費 15K04120 の助成を受けたものです。また、愛知教育大学大学院教育学研究科教育支援高度化専攻臨床心理学コース在籍中の杉山慶亘さんの協力を得ています。併せて感謝申し上げます。